

# 2014年公開セミナー第5回報告

11月27日

飯沼健雄

11月25日第5回セミナーを皆様のご協力で終了できました。以下セミナーの状況を報告致します。今回は円覚寺横田南嶺管長による特別講演でした。

「円覚寺のこと」 横田南嶺 於大方丈

## 1. 講演内容

### ① 概要

700年以上の円覚寺の歴史の基礎を作り上げた4人の祖師、開山・無学祖元禅師、夢想国師。誠拙禅師、今北洪川老師の軌跡を取り上げながら円覚寺の禅の教えの講話をされた。

### ② 開山・佛光国師無学祖元禅師（1226～1286）

14才で径山に登り17才から発心（仏陀の悟りを得ようと決心する）して「無」とは何かを求め7年間の禅定の末悟りに達する。

「一槌に打破す、精霊窟、突出す、那吒の鉄面皮。両耳聾の如く、口唾の如し、等間に触著すれば火星飛ぶ」  
（槌の音ではっと気づいた。本当の自分が見えた。耳は聞こえず口も聞けぬが我が身はうっかり触ると火花が散るほどだ）

はその時の昂りを表現したもの。その後南下した元の兵士が攻め込み大刀で脅かされた際唱えた句が「電光影裏春風を斬る」（稲妻が春風を斬るようなもので、魂まで滅し尽くすことはできない）

1279年北条時宗の招きに応じて来日。日本と元との戦いである元寇が起り、1281年（弘安4年）、2度めの戦いである弘安の役に際して、その一月前に元軍の再来を予知、時宗に「莫煩惱」（煩い悩む莫（な）かれ）と書を与えた。1282年元寇の戦没者を弔うため北条時宗は無学祖元を開山として円覚寺を建立した。1284年北条時宗が亡くなり、その2年後の1286年示寂。最後に残した言葉は「法の為人を求めて日本に來たり、珠周り玉転じ荒苔に委ぬ。大唐沈却す、孤筇の影、添い得たり、扶桑一掬の杯」

無学祖元の教えを最も良く表す言葉として命の世界では全てが平等であるとした「仏光録卷四」にある「此軍及び他軍、戦死と溺出水と、萬衆無歸の魂、唯願わくは速やかに救拔して、皆苦海を超ゆることを得、法界了に差無く。怨親悉く平等ならんことを」

### ③ 第一五世 夢窓国師（1275～1351）

伊勢国出身。50才までは各地を転々とした。1326年北条高時に招かれ、円覚寺に在住。1333年に鎌倉幕府が滅亡すると建武の新政を開始した後醍醐

天皇に招かれた。最初は老齡を以て固辞する夢窓国師と後醍醐天皇の遣り取り。また北条が滅び禅宗も滅ぶと考えていた反関東勢との対応が以下の記録に表されている。

「上（後醍醐天皇）曰く、師（夢窓国師）を請じて南禅に再往して宗乗を挙揚せよ。師は辞するに老病を以てす。上曰く、仏法の隆替は其の人に係る。若し師固辞せば、朕も亦之を如何ともする無くして止まん。師已むを得ずして詔に応じて再住す。

始め関東滅ぶ時、人皆謂えり。禅苑其れ興らじ。最明寺殿平公は世禅宗を護る。子孫相継いで其の法を欽奉せり。天下化して之を奉ず。今平氏已に滅べり。慙うに禅宗誰か復た護ることを為んや。是に至って詔降って師を召したまう。禅徒の謹呼の声山林に溢れ、街衢に徹す。」

かくして禅宗の滅亡を防いだ夢窓国師その後足利尊氏にも招かれたため変わり身が早いとの悪評もあるが唯仏法を伝える事を旨とした無私の姿勢は天下が変わっても変わらずに信頼されたのであろう。

#### ④ 中興 第189世 大用国師誠拙周樗禅師（1745～1820）

江戸時代後期の円覚寺は、僧侶が寺で博打などするほど、墮落して、「外」からではなく「内」からの危機状態にあった。

そんな中、師匠の月船禅師から円覚寺再建を命じられたのが大用国師・誠拙周樗禅師であった。誠拙禅師は、命じられた通り、円覚寺に行きますが、そのあまりのひどさに挫折し、師匠のもとに帰ってしまう。

帰ってきた弟子に師匠である月船禅師は「お前を見損なった」と言う。そこには、「お前にはどんなひどい状況の円覚寺でも再建できる力があるとわしが認めたから、それを命じたのにおめおめと帰って来おって！自分で自分を見限るな！」という思いが込められていた。

それをきいた誠拙禅師は、発憤し円覚寺に戻り、博打打ちをする僧侶たちにお茶だしをすることから始めて、10年をかけ徐々に周りを感化していき、見事に円覚寺の再建を成し遂げた。

歌人としても多くの歌が残されている。

草木にもこころありけり われ見よとけさ咲きそむる庭の白萩  
音つれていさめたまいしことのはのふかき恵みをくみて泣けり  
つみあるも罪なき人もほとけぞとしればすなわち佛なり

#### ⑤ 第二百二世 初代管長 今北洪川老師（1816～1892）

明治維新後廢仏毀釈の為多くの寺院が危急存亡の時を迎えた。其中で初代管長について今北洪川老師は雲水のみならず、一般大衆に対する禅指導に力を注ぎ、山岡鉄舟などの著名人が参禅した。弟子としては、渡米して禅の宣揚につとめた鈴木大拙らが出た。

## ⑥ むすび

「無」とはなにか、其の中で「真実」とはなにか、其れは「慈」である。

### 無真慈

## ⑦ 横田南嶺老師プロフィール

道号は南嶺、諱は康岳、室号は青松軒と申し上げる。

昭和39年11月、和歌山県新宮市に生まれる。ご生家は鉄工所なり。

9歳。小学校4年生のとき、清閑院（新宮市）で開かれた坐禅会に参加した折、最終日に興国寺（和歌山県由良町）の目黒絶海老師の提唱に列す。老師が恭く三拝するを見て、仏道の世界に目覚める。また老師が一同に向かって合掌し、「皆様はみんな仏様です」と言われたその言葉に深く疑問を抱くという。

12歳。中学校1年生のとき、清閑院のご住職の勧めによって、興国寺に赴き、目黒老師に相見、この時より参禅を始める。

中学時代、上京して龍源寺（港区三田）に松原泰道和尚を訪ね、教えを受ける。

昭和58年。18歳。筑波大学入学。同時に、龍雲院・白山道場の小池心叟老師について参禅。在学中に龍雲院で出家得度す。

昭和62年。22歳。大学卒業と同時に、京都・建仁寺僧堂に掛塔。湊素堂老師に参禅。

平成2年。25歳。梅林寺（福岡県久留米市）僧堂に転錫。東海大光老師に参禅。

平成3年。26歳。円覚寺僧堂に転錫。足立大進老師に参禅。後に法嗣となる。

平成10年。33歳。円覚寺僧堂師家代行に就任。同時に円覚寺塔頭・黄梅院の住職となる。

平成11年。34歳。円覚寺僧堂師家に就任。

平成15年。38歳。円覚寺歴住開堂。住持二百十八世を稟承す。

平成17年12月。41歳。本師・小池心叟老師遷化により、龍雲院を兼務住職

平成21年。「禅林句集 足立大進編」（岩波文庫）の編集に従事して出版す。

平成22年4月。45歳。円覚寺派管長に就任。

平成23年1月。龍雲院・白山道場で禅会「坐禅の集い」を創める。同時に興禅護国会師家に就任す。

平成24年4月。全日本仏教会副会長に就任。

著書に、「青松閑話」、「延命十句観音経のはなし」、いろはにほへとある日の法話より」、「祈りの延命十句観音経」がある。

DVDに「精一杯生きよう」（禅文化研究所）がある。

## 2. 椅子坐禅

当日横田管長が僧堂撰心の提唱を行う間を使い内田一同和尚の指導で椅子

坐禅を参加者が実践した。数分の短時間であったが初めての体験であった、身体が暖まったなどの感想が寄せられた。  
その後の管長入場時に延命十句観音経が、退出時に延命十句観音和讃が賛同された参加者含め唱和された。

### 3. 参加者

#### ① 参加者数

当日申し込み者を含め一般参加者150名、淡青会スタッフ15名の合計165名であった。事前申し込みが早すぎて都合が悪くなったり、寒さが強く体調を崩しての欠席が多数あった。

#### ② アンケート・講演に対する感想

特別講演に引き込まれたせいかアンケートの回収は38件にとどまったがその全てで講演内容に満足、感動、心洗われる、再度聞きたいというキーワードで埋まっている。

淡青会の公開セミナーについても感謝、広い分野からの講演内容に感心、継続して欲しいとの要望が多くあった。

今回の特別講演で2014年度淡青会公開セミナーを全て終了致しました。  
講演をお引け受け頂いた講師の皆様、会場準備、当日の応対にご協力頂きました皆様に心よりのお礼を申し上げて報告と致します。

以上